まえがき

本書は、神奈川大学人文学研究所の「言語景観と多文化共生」共同研究グループによる研究成果である。多文化共生とは、「多文化共生の推進に関する研究会報告書」(総務省 2006 年) にあるとおり、さまざまな立場にある人々が「互いの文化的な違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」である。

本共同研究グループは、「観光立国実現へ向けた言語景観—多文化共生社会での情報発信を再考する—」という研究課題で、2020 年 4 月から 2023 年 3 月まで神奈川大学共同研究奨励金の助成を受けられることになった。もともとは、多文化共生の観点から観光と言語景観に関する諸現象を調査・分析・考察する予定だったのである。しかし、新型コロナウィルス感染症 (COVID-19) の世界的な流行によって、研究開始直後の 2020 年 4 月に緊急事態宣言が発出され、事前に計画していた観光地での現地調査を実施できない状況に直面した。

予想外に長引いたコロナ禍の期間中は、オンライン会議ツールを利用して定期的に研究会を開催しつつ、それと並行して、各メンバーは、観光地での実地調査に行かなくてもできることを探した。例えば、外国人観光客だけでなく外国人定住者や滞在者にもかかわる情報発信のあり方に目を向けたり、旅行時以外に日常でも利用可能な公園や公共施設に注目したり、大学キャンパスや自宅所在地周辺で言語景観を観察・撮影したり、公共サインや観光パンフレットを分析したり、という具合である。

そのため、本グループの活動は、大なり小なり当初の予定とは異なる方向に進んできた。紆余曲折を経た結果、これまでさほど注意されてこなかった事象をあつかうことにもなって、「多文化共生」という漠然とした概念を分析的にとらえる足がかりにできたかもしれない。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

実際に「どういう異なる立場の人どうしで（観光客・現地住民・現地語の理解度・習熟度の高低等）、どういう状況のもとで（日常・非日常、平常時・災害時、対面・非対面等）どういう問題が生じ（提供情報の有効性、対人配慮上のイメージ等）、どういう方法での解決が必要となり（使用言語や表記方法の選択、提供情報の内容策定等）、その結果どう共生していくのか（利便性やイメージの向上、不平等の解消や不当評価の回避等）」というように、「多文化共生」にかかわる諸要因の具体化を考える機会にできたと言えるかもしれない。「禍を転じて福と為す」研究活動になったことをのぞんでいる。

本書では、多文化共生社会においてどういう情報をどう発信するのがのぞましいか、時には情報を受けとる立場にも身をおきながら、メンバーそれぞれの着眼点から、研究対象となる事象について現状を記述し、今後、改善や解決が求められる課題の提起にも取り組んだ。各章には写真も多数掲載されているが、どの執筆者も、特定の情報発信者を批判する意図はまったくない。本書で記述の対象にならなかった類似の事象にも参考価値を提供できるよう期待してのことである。その点をご理解いただけたら幸いである。

なお、本書は全四部・合計八章で構成されている。4つのコラムもふくめて、ゆるやかな内容のつながりをもたせてあるが、興味・関心にあわせて、どの章から読んでいただいてもさしつかえない。コロナ禍と同時にはじまった本共同研究の成果が、社会のさまざまなところで「多文化共生」や「情報発信」にかかわっている方々に少しでも役に立てるよう切に願っている。

神奈川大学人文学研究所
「言語景観と多文化共生」共同研究グループ

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

目次

まえがき ……iii

第1部　観光情報の発信と旅行者の利便性を考える

第1章　横浜の言語景観と観光情報発信 ……3
—港街の魅力発信に関する考察—　由川美音

第2章　中国語パンフレットの情報提供から考える観光行動の支援方法……21
—言語特性・地域特性・行動特性の観点から—　鈴木慶夏

コラム1　観光都市バルセロナとオーバーツーリズム……61
—地域住民との共生の観点から—　堤　明子

第2部　定住者・生活者にも関わる情報提供のあり方を考える

第3章　公園施設等における「日本語のみ」の表記にはどのような課題があるか……69
—社会における不当評価や不平等を生まない表記について考える—
佐藤　梓

第4章　韓国の多文化家族（multicultural family）に対する言語政策……97
李　忠均

コラム2　港町神戸……119
—多文化モザイクそぞろ歩き—　鈴木幸子

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第3部　教育・学習をめぐる言語景観と環境を考える

第5章　ロシア語の言語景観……127
—戦争・多文化共生・言語教育の観点から—　小林　潔

第6章　キャンパスにおける言語景観との接触……149
—言語景観はレアリアとなり得るか—　髙木南欧子

コラム3　キャンパスの自治と観光の共存……179
—言語景観に映るアフォーダンスとシグニファイア—
髙木南欧子・佐藤梓

第4部　言語景観・公共サインのもつ意味を考える

第7章　アジアの観光都市に見る英語サインの役割……187
鈴木幸子

第8章　東京・ソウル・北京・台北の言語景観の特徴……215
—「観光公用語」の導入を視野に入れて—　尹　亭仁

コラム4　長崎の多言語景観にみる国際観光都市としての顔……243
由川美音

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 1 章

横浜の言語景観と観光情報発信

—港街の魅力発信に関する考察—

由川美音

要旨

日本国内において、観光地としての横浜の知名度は高い。しかし、東京を旅行の起点として入国する、あるいはクルーズ船で訪れる外国人観光客には、横浜は東京近郊であるが故に、観光地として選ばれないという問題点がある。そこで、本研究では、横浜に見られる多言語景観における情報発信について、横浜市港湾局職員の情報や言語景観の観察をもとに考察を行う。

本論では、外国人観光客が横浜を訪れる際に生じる可能性のある問題として、目的地へのアクセスや情報のわかりにくさを指摘している。言語景観の中でも、特に街頭にある、方向や距離を示す誘導サイン・地図などの案内サイン・施設の解説をする説明サインに注目し、固有名詞の表記の揺れが混乱を引き起こす可能性があるため、ガイドライン適用外の事業者にも表示の統一を求める必要があることを提案した。また、観光案内所では外国人観光客のニーズに合った資料が不足している現状があり、それを改善することも提案する。さらに、地元の「人」とのつながりを感じられるコンテンツを開発し、それを多言語で提供することで、横浜観光を促進する施策の案を述べている。

キーワード

横浜、公共サイン、多言語観光資料、コト消費、アクセシビリティ

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第2章

中国語パンフレットの情報提供から考える観光行動の支援方法

―言語特性・地域特性・行動特性の観点から―

鈴木慶夏

要旨

本稿は、「多文化共生社会における情報発信を再考する」ために、中国語圏からの訪日旅行客に向けた中国語パンフレットを考察材料にするものである。中国語による観光パンフレットでの情報提供のあり方を調査し、中国語母語の旅行者が観光行動を起こすために必要な情報をどの程度獲得できるのかを考察する。そして、多文化共生社会での情報発信のあり方を考えるには、どのような社会的課題を抽出できるか、また、その課題に対しどのような改善策や検討事項を提起できるかについて述べる。調査の結果、中国語圏からの旅行客が訪れる観光地や施設の名称について、日本語での呼び方を示す情報が提供されていないケースが多いことがわかった。そのため、旅行者は日本国内で現地の職員や住民と口頭でやりとりする際、漢字表記が誘因となり、さまざまな困難に直面してしまうのである。課題への改善策として、日本語の言語特性の一つである「固有名詞の漢字表記が具有する難読性」に対しローマ字表記を併用するという支援方法を、中国語パンフレットにも適用・兼用することがのぞまれる。

キーワード

観光行動、情報提供、言語特性、地域特性、行動特性、漢字の難読性と不可読性

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第3章

公園施設等における「日本語のみ」の表記にはどのような課題があるか

―社会における不当評価や不平等を生まない表記について考える―

佐藤　梓

要旨

本稿では、さまざまな背景をもつ不特定多数の人々が利用する公園施設等に注目し、その施設内にある案内板、注意書き、掲示などに日本語のみで書かれているものにはどのような課題があるかを考察する。都市にある公園は、レクリエーションを目的に使用される場面が多いが、地震などの災害や緊急時には、避難場所となることもある。これらを踏まえ、緊急時に使用することも想定し検討をしたが、現在はすでに多くの場所で多言語での表記が増えており、日本語のみで書かれているものがあったとしても、命に関わるような課題は見受けられなかった。しかし、日本語のみで書かれた案内や注意書きは実際にさまざまな場所で存在しており、その内容が理解できないことにより、他者から不当な評価を受ける可能性や誰もが受けられるサービスを受けられないなどの不利益を被る可能性があることが明らかになった。日本語の理解度の差が不当な評価や不利益につながることがないよう、案内や注意書きの提示方法を検討していく必要がある。

キーワード

公園施設、平時・災害時、不当な評価、不平等、不利益

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第4章

韓国の多文化家族（multicultural family）に対する言語政策

李（イー） 忠均（チュンギュン）

要旨

本稿は、韓国における多文化家族に対する言語政策の流れの紹介と、韓国内で多文化学生が多く在学している小学校の実地調査について報告するものである。多文化家族は、家族構成により、韓国人＋結婚移民者・帰化者（狭義の多文化家族）、海外出身の帰国韓国人（朝鮮族、高麗人）、外国人家族（広義の多文化家族）に分けることができる。多文化家族への言語教育は、彼らが社会の一員になることで人口減少社会に突入した現在から脱皮する現実的な打開策になると考えられる。また、移住者が地域の一員として積極的に活動し、地元住民と協力して地域の課題に取り組むことで、地域社会の活性化が促進される。なお、地元住民の異文化受容に関する意識向上のため、外国語教育の強化や相互の文化を尊重する社会的雰囲気を作ることや、多文化学生への言語教育だけではなく、移住者である親世代の出身国を理解する教育も必要である。

キーワード

多文化家族、言語政策、支援計画の推移、韓国語教育、高麗人

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第5章

ロシア語の言語景観

―戦争・多文化共生・言語教育の観点から―

小林　潔

要旨

ロシア語は表記にキリル文字を用い、ウクライナ語もそうである。現況ではロシアとウクライナを切り離して考えることはできない。文字の異同を見ることで両言語に言及する。その上で、日本の多言語対応政策とそこでのロシア語の位置づけを確認し、ロシア語が表記される場面の幾つかを、施設特性や地域特性の観点及び共生の観点から取り上げる。北海道、東京、横浜の事例の他、交通機関での多言語表示、ヘイトの対象になったロシア語表記を示す。事例を通して、ロシア語表記はロシア語話者への情報提供という点で実用的でもあるが、それ以上に、ロシアとの繋がりを示すシンボル的な機能を持つことを主張する。ウクライナとの関わりも問題になる。ロシアに関わる諸問題や多文化共生を考える上での材料を提供し、言語教育での言語景観の使用や言語教育と切り離せない世界の中でのありかたや時代背景の考察につなげる。

キーワード

キリル文字、ロシア語、ウクライナ語、多文化共生、言語教育

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第6章

キャンパスにおける言語景観との接触

―言語景観はレアリアとなり得るか―

髙木南欧子

要旨

言語景観が日本語学習者のレアリアとなり得るかをみるために、交換留学生の目に映るキャンパスの景観について調査を行った。その結果、景観を言語景観として認識するためには、ある程度の日本語能力が必要であること、及び、日本語能力が高くなると、単語の長さを越え、文構造を有するような長さにまで意識が向けられることが分かった。しかし一方で、言語景観への認識力の高さは、日本語学習の期間や日本語能力の高さとそのまま比例するわけではないことも分かった。言語景観をレアリアとできるか否かは、環境に対する意識の持ち方が影響することがうかがえた。

キーワード

言語景観、キャンパス、日本語学習、レアリア、アフォーダンス

I. はじめに

一般的に、レアリア（realia）との接触は、外国語の学習において有効であるといわれている。レアリアは、看板やチラシなどの実物を指す狭義的な立

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第7章

アジアの観光都市に見る英語サインの役割

鈴木幸子

要旨

国際的観光地に設置されている多言語案内サインは、観光者が言語や文化の異なる国で支障なく目的地に到達し、希望する観光行動を達成するためには欠くことのできない視覚情報である。アジアの国々で目にする案内表示は、その国の公用語に加えてその言葉の説明として英語が併記されていることが一般的である。一方、英語圏のほとんどの国では、案内表示は英語のみで記されていることが多く、またヨーロッパの国々で目にする案内板にも公用語に英語が併記されているケースは少ない。本稿ではアジアの国々で公用語の次に付されるのがなぜ英語であるのか、その役割は何なのかを明らかにするために、観光大国であるシンガポール、タイ、ベトナム、韓国の観光地における多言語表示のデータを収集し、分析を試みた。結果として、ASEAN の国々の英語使用には、歴史的境遇がもたらした外的要因と国際的な地位の確立という役割が確認された。また、日本における英語使用について、ポライトネス理論、およびホスピタリティの概念との関連性から、今後の観光アクセシビリティの向上に役立てる方策を考察した。

キーワード

観光アクセシビリティ、アクセシブル・ツーリズム、英語案内サイン、ポライトネス理論、ホスピタリティ

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第8章

東京・ソウル・北京・台北の言語景観の特徴

—「観光公用語」の導入を視野に入れて—

尹　亭仁

要旨

本稿では、東アジアの代表的都市の東京・ソウル・北京・台北の多言語表示の様相を実地調査に基づいて「アクセシビリティ」と「ホスピタリティ」の観点を交えながら取り上げた。

東京の場合、観光庁のガイドラインに従って全国的統一感と持続的改善が見られており、ソウル・北京・台北の場合、国際空港や地下鉄駅、観光地を中心に多言語表示が進んでいる。東アジアの4都市で展開されている多言語表示の様相を、複数の公用語を認めている国の首都シンガポール・マニラ・ブリュッセルと比較して、「観光公用語」という観点で捉えることの可能性に加え、言語バリアフリーと多文化共生につながるとの示唆を得た。コロナ禍が収束してから東アジアの国や地域間の観光をめぐる協力体制も緊密になってきており、互いの影響から多言語表示が目指すことは、つまるところ「多文化共生」であると言えそうである。

多言語表示の整備は外国語教育において視覚教材としての機能も果たしているため、多言語表示サービス施設の拡充にも注目していきたい。

キーワード

言語景観、アクセシビリティ、ホスピタリティ、多言語表示サービス施設、観光公用語

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers